

「それは人間であることと 何の関係があるのか」を思う



これは学生時代、教育学の楠原彰先生が良く口にしていた言葉です。出典はヨーロッパのルネサンス期に神に拠らず人間をありのままに解放しようとする革新運動にある。硬直した封建制度とキリスト教神学がもたらす非人間化に抵抗したヒューマニストたちのメッセージです。講義に惹き込まれた記憶は半世紀経ても今も蘇る。何かにつけ脳裡を駆け巡る座右の銘のようなものです。

1945年3月10日の東京大空襲で戦争孤児となった木村マスさんの体験をお聞きしました。地獄絵のような惨憺たる状況、奪い取られた両親と弟妹の死、憲兵たちの監視。よき理解者だった伯父の死、叔父叔母たちの言動の冷酷さ、過酷な農作業や家事、疎外感ばかりの日々、「下僕として働け」と。伴侶と三人の子どもに恵まれた幸せな生活も従兄の子の精神疾患が引き起こしたマスさん養育への見返り要求。マスさんへの誹謗中傷による実子の悲しみ。東京大空襲裁判の原告になった時の義姉の「国の厄介者か犯罪者か泥棒か」という冷酷さと周囲の人たちの拒絶。

それはそれは共感ではなく、心に共鳴してくるような神経を揺るがす憤怒と言えるものでした。時の流れが止まった瞬間瞬時の連続でした。

最後に、戦争によって否定され邪魔者にされるのは障がい者、子どもたち、老人ですと話され、平和は一人では歩いてこない、被団協へのノーベル平和賞受賞のこともあり国連機関と歩調を合わせて協力し

合うことの大切さを力強く語ってくれました。会場の皆さん一人ひとりが無言で頷いていました。

やはり体験した人の言葉のすべてがとても重いし、歴史を伝えるパワーが尋常ではないことを感じました。心より感謝申し上げます。

思うのです。マスさんが体験した事実一つ一つが「それは人間であることと何の関係があるのか」と問い直してみると、人間扱いしないことばかりだ、と気付く。戦時体制に縛られ、国の体制に心まで締め付けられ、命の大切さは反故にされ、人間の尊厳は一切切切語られることがないことばかり。それが化けの皮をはいだ戦争というものです。戦争は人間の顔をしていないのです。東京大空襲裁判の民間人被害について司法は“戦争被害受忍論”を唱えるが、「我慢しろ」と吐き捨てていることと同じだ。人間が起こすのが戦争。しかし人間の顔をしていない。それでは何の顔をしているのか？ 非人間化した人間のような魔物か。

楠原彰先生の教室や研究室に戻って、話してみたい衝動に駆られた木村マスさんの語る会だった。

今年の年賀状に先生のこんな一文があった。ガザの子どもたちの傍らに今すぐ飛んで行きたいとして、「身勝手な欲望に囚われた者たちが/『人間であること』の風前の灯の希望を/世界中の人々から奪い取ろうとしている」みなさまに平安を！と結ばれていた。

元井 茂

2025. 3. 10 記

スタンディング 4月9日(水)市役所前 4月19日(土)コープ栃木店前 午後4時～
※4月から開始の時間は、午後4時からとなります。
スタッフ会議 4月10日(木)・25日(金) くらら4階 午後1時半～

